Ⅳ　校内研究推進計画

教育研究部

令和５年度　研究推進計画

１　研究の概要

（１）研究主題・副題

自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童の育成
～多様なかかわりから自己を見つめ,他者と共に学びを深める学習を通して～

（２）研究主題の設定理由

高度情報化社会の進歩と共に，時代は Society5.0 のステージに向かおうとしている。ビッグデータを活用した情報管理や，タブレット端末や AI 機器の普及など，児童を取り巻く環境はめまぐるしく変化し，児童と社会をつなぐ接点が，情報機器を使ったつながりに移る一方で，周囲や地域など生身のつながりが薄れつつある。このような社会の変化は，児童をより「閉ざされた個」にし，他者が自分をどう見ているかということに気を注ぎ,自ら周囲や社会に働きかけたりする積極性や粘り強さがなくなりつつある。

本校は，平成 29・30 年度と「『道徳教育改善・充実』総合対策事業（メニュー１）」の指定を受け，道徳教育を推進してきた。その中で，導入・思考・振り返りの場面を位置付けた１単位時間の学習展開や，カリキュラムマネジメントを生かした「パッケージ型ユニット道徳」の実践・改善を行ってきた。昨年度からは生活科・総合的な学習の単元開発を進め，地域のよさを見つめ，地域とのかかわりを深める学習を進めてきた。結果,児童アンケート調査（令和４年度）によると,向上心や粘り強さ（4 月 80%，１月 87%），他者を尊重する意識（４月 89%，1 月 93%）や集団や地域への参画意識（４月 75%，1 月 88%）が高まっていることが分かった。

しかし自尊感情については,「自分にはよいところがある」と回答した児童は 81%で，高学年になるにつれ否定的な回答が増加する傾向にあった。また「自分が，学級やまわりの人から認められている。」と回答した児童は 76%に止まり，自己肯定感や自己有用感が十分でない児童が約 24%だった。発達段階ごとに傾向は異なるが,「自分の理想と等身大の自分に差があり，がんばったことや自分のよさに目を向けにくい。」「自分自身を上手に表現できず，他者とのかかわりに自信がもてない」「他者に同調して物事を進めがちで，自分の個性を発揮できていない」などが要因として考えられる。

そこで，研究テーマを「自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわる児童の育成～多様なかかわりから自己を見つめ,他者と共に学びを深める学習を通して～」とし，道徳教育を中核にすえ，道徳の時間，生活科・総合的な学習の時間，各教科・特別活動とのつながりを大切にカリキュラムマネジメントを生かした教育活動を充実させる。その中で，児童の自己肯定感を育むと共に，自分を取り巻く集団や社会・外界に対して,主体的にかかわりながら問題解決したり,新たな価値を創造したり,他者とよりよい生き方を求めたりする態度を育てることをねらいとして，取組を進めることとする。

（３）めざす児童の姿　～自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童～

〇自らを表現する児童とは

本校がめざす「自らを表現する児童」は，単に技能的に表現力が高い児童を意味するのではない。他者や集団，周囲（社会）とのつながりの中で培われる自己有用感や，ありのままの自分を受け止め，自らを伸長させようとする自己肯定感に支えられ，自分の感じ方や思い・価値観などを，自分の経験や体験,学びなどをもとに思考・判断し，自分なりの言葉や方法で表す児童を指している。

人は自らの思いを表出するとき，自分の心の内にある感じ方や思い，価値観などに問いかけながら，思考し，自分の思いがより表せるように言葉を紡いでいく。自分の内なる世界を真摯に表した言葉は自分自身そのものであり，自分の表現が価値あるものと認められれば肯定的な感情が生まれる。このように自らを表現することは，自分の内なる世界を外化することであり，自分らしさの表出でもある。また表現は，認知的活動（思考・論理）ともつながっており，ヴィゴツキーを始めとする多くの研究者が，自己の内言を外言化する言語の重要性や,学習者が自らの内なる世界を外言化したり内言と外言化された世界を往還したりすることで，獲得した概念がより明らかになると言及している。

だが自らを表現することに抵抗を感じる児童は少なくない。これは，自らの思いを表出する経験の少なさもあるが，自分自身への自信のなさや自分を取り巻く周囲がどう受け止めるかといった不安感，自らの内なる世界への過度の固執なども要因とされている。小学校学習指導要領解説　総則編（平成 29

年）によると，「言語は知的活動（思考・論理）の基盤であるとともに，コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり，豊かな心を育む上でも，言語に関する能力を高めていくことが重要である」と述べ，言語活動の重要性について明示している。このことから，自らを表現することは，個としての知的活動（思考・論理）や感性や情緒の働きだけでなく，自尊感情や自己実現への意欲，周囲とのつながり，他者とのコミュニケーションといった他者の介在にも大きく関係していると言える。

国立教育政策研究所（平成 27 年）によると，「自尊感情が高いことは，必ずしも自己有用感の高さを意味するのではなく，他者の存在を前提としない自己評価は，社会性に結びつくとは限らず，自己有用感に裏付けられた自尊感情が大切である」と言及している。自己有用感は「他者の役に立った」「他者に自分を理解してもらえた」など他者とのつながりの中で培われる自尊感情で，「他者よりもできた」「一番になった」などの自己有能感とは意味合いが異なる。自尊感情については様々な定義や解釈があるが，近藤卓（2010）は，自尊感情をすごい自分（社会的自尊感情）とありのままの自分（基本的自尊感情）の二つの領域に分類し，健全な自尊感情を育むためには，後者を土台とした自尊感情を，他者と共感的に感情や体験を積み重ねながら育むことが大切であると述べている。また前野隆司（2013）は，人の幸せとがんばる心の相関関係について調査し，幸福度の感じ方には，①自己実現と成長（やってみよう因子），②つながりと感謝（ありがとう因子），③前向きと楽観（なんとかなるさ因子），④独立と自分らしさ（ありのままの因子）という４つの因子が関係していると述べている。

健全な自己肯定感は，他者や集団，周囲（社会）とのかかわりの中で自分の個性や存在が認められ，自分らしく力を発揮できる居場所（自己実現の場）があってこそ育まれ，その安心感や心地よさが土台となり，自分を見つめ，他者とよりよい生き方や在り方を考える態度の育成につながると言える。つまり人とのつながりの中で培われる自己有用感の育成と自己実現の場が，自己を見つめ，ありのままの自分・よりよい自分を考える土壌となると言える。

これらのことから，「自らを表現する児童」を，「自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲に支えられ，自分の表したいことを情報や経験（体験），学び（成長）などをもとに思考・判断し，自らの感じ方・思い・価値観などを自分なりの言葉や方法で表す児童」とする。

〇自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童とは

本校でめざす「自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童」とは，「自分を取り巻く外界（『ひと・もの・こと』）に対して受け身ではなく，それらに自ら働きかけ，試行錯誤しながら問題解決したり，他者の多様な考えや価値（観）にふれながら集団や周囲（社会）をよりよくするために自らできることを考え実践したりする児童を指している。

児童は，教育活動全般において多様なかかわりの中で活動している。これらを大別すると，「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「集団や周囲（社会）とのかかわり」「外界（もの・こと）」とのかかわり」に整理される。しかし児童は，自分を取り巻く環境には多様なかかわりがあるにもかかわらず，無意識に活動するあまりそのよさに気付かないままであったり，体験や経験の中で得た負の感情や一面的な見方に固執したりすることが多い。例えば，自分を他者と比べて「自分はだめだ」と思い込んだり，自分にとって都合の悪い人を「〇〇な人」と決めつけたりする。また集団活動においても，「だれかが何とかしてくれる」と受け身がちになり，他者の努力や働きが見えないままで過ごしていたりする。だからこそ，多様なかかわりから自己を見つめる活動は，自分と他者，自分と周囲，そして自分自身を見つめ直す上で，大切な活動だと言える。

豊かにかかわるとは，児童が自分や他者，集団や周囲（社会）にしなやかに粘り強くかかわり，一方的，固定的ではなく，多面的にその価値やよさをとらえ，より主体的にかかわっていこうとする態度も意味している。そのためには，他者の存在が重要で，自分とは異なる他者の考えや価値観にふれる中で，学びの対象だけでなく，自らの学びの深まりや成長に気付き，それがさらなる知的活動への意欲（自己実現への意欲）や自己肯定感にもつながっていく。このように自分を取り巻く集団や社会・外界に対して主体的にかかわろうとする態度を育てることは，自己認識を深め，自らの生き方や在り方を今後の自分のキャリアとつなげて考える足場となると考える。

これらのことから，「自他や周囲と豊かにかかわる児童」を，「自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲に支えられ，他者と共によりよく生きるために，自分・他者・周囲（集団・社会・外界（「ひと・こと・もの」）と主体的にかかわり，実践しようとする児童）とする。

以上のことから，本校でめざす「自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童」は次の通りである。

めざす児童の姿：「自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童」とは

自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲に支えられ，自分の表したいことを情報や経験（体験），学び（成長）などをもとに思考・判断し，自らの感じ方・思い・価値観などを自分なりの言葉や方法で表すと共に，他者と共によりよく生きるために，自分・他者・周囲（集団・社会・外界（「ひと・こと・もの」）と主体的にかかわり，実践しようとする児童

〇自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわる児童の具体的な姿

【自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲に支えられている】	
自己有用感	・他者とのかかわりの中で，自分が役立っている，認められていると感じている。
自己肯定感	・すごい自分だけでなく，ありのままの自分も大らかに認めている。（社会的自尊感情と基本的自尊感情の調和）
自己実現への意欲	・自分の力を発揮したり向上させたりすることへの意欲を持っている。（自己実現）
【自分の表したいことを情報や経験（体験），学び（成長）などをもとに思考・判断し，自らの感じ方・思い・価値観などを自分なりの言葉や方法で表す】	
感性・情感 知的活動（思考・表現） コミュニケーション 豊かな心	・自分の感じ方や思い・価値観などに問いかけながら，より自分の思いが適切に表現できるように表している。 ・様々な情報（場面，立場，状況など）をもとに，自分の思いや考えを構築し，その根拠となること（情報，自分の経験や体験，学びなど）を明らかにしながら（理由付け）表している。 ・自分とは異なる他者の考えや価値（観）にふれたり，学びの過程を振り返ったりすることで，自らの認識や自己の生き方について考えが深まったことに目を向け，表している。
【他者と共によりよく生きるために，自分・他者・周囲（集団・社会・外界（「ひと・こと・もの」）と主体的にかかわり，実践しようとする）	
自分と豊かにかかわる	・自分を一面的に捉えるのではなく，さまざまな側面から等身大の自分を見つめ，よさや個性，がんばり（成長）などを認めつつ，自己に希望や夢をもち，さらによりよく伸ばしていこうとする。
他者と豊かにかかわる	・他者の個性や特徴を認めると共に，他者の気持ちを推し量りながら，共によりよく過ごせるように，自らできることを考え実践しようとする。
集団や周囲（地域）と豊かにかかわる	・集団や地域のよさに気付き，その一員として，目的を達成したり問題を解決したりするために，自分の役割を果たすと共に，集団や地域のために，自らできることを考え実践しようとする。
「こと・もの」と豊かにかかわる	・自分を取り巻く外界（対象）に対して，問題を見出し，その解決のために，試行錯誤しながら粘り強く取り組んだり，新たに問題や目的を見出したりする。

（４）研究のねらい

自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわろうとする児童の育成を目指し，多様なかかわりから自己を見つめ，他者と共に学びを深める学習を充実させる効果的な実践方法を研究する。

〇多様なかかわりから自己を見つめ，他者と共に学びを深める学習の充実について

人とのかかわりの中で自己実現をすることは容易なことではない。自分とは異なる他者の考えや価値観を知り，比べ，自分の考えを見つめるといった過程が欠かせない。異なる考え方や価値観をもった人同士が真剣に向き合い，その根拠や理由の違い，表現の細かなニュアンスの違いなどを話し合い，ひと・もの・ことへの認識を変化・深化させていく豊かな学びを通してこそ，自己実現への高みにつながっていく。そのためには，多様なかかわりから自己を見つめる過程と共に，自分とは異なる他者を意識し，協働して問題を解決したり，共によりよい生き方を問い続けたりする学びの過程が大切となる。

そこで，本校では，「『ひと・もの・こと』と多様にかかわる場を通して，問題を見出し，自ら試行錯誤したり他者と協働したりしながら問題を解決する探究的な学習過程」と共に，「他者の多様な考えや価値観にふれながら，自己を見つめ，自らの認識を変化・深化させたり，自己の生き方について考えを深め

るといった生き方や在り方を考える学習過程」の二つを大切にすることとする。
　この二つの学習過程を１単位時間や単元全体の学習の中で具現化するためのキーワードが，「かかわる」「表す」「見つめ直す」である。特別の教科　道徳におけるこれらの要素と主な学習活動，めざす児童の姿との関連は次の通りである。

○「かかわる」「表す」「見つめ直す」学びにおける主な学習活動

要素		主な学習活動	めざす児童の姿との関連
かかわる		・問題意識をもち，対象に働きかけようとする。 ・情報（場面・立場・状況など）をもとに，共感や批判を通して「選択・判断」をし，対象に働きかけようとする。	自己実現 知的活動
表す		・自分の感じ方や思い・価値観などを自分なりに表出する。	感情・情感 知的活動
見つめ直す	対象を	・道徳的価値の理解（価値理解・人間理解・自己理解）を深める。	知的活動
	他者と	・対話を通して他者の多様な感じ方や価値観にふれ，物事を多面的・多角的に考える。	知的活動 コミュニケーション 自己有用感
	自らを	・道徳的価値を自分のこととして感じたり考えたりしながら（これまでの自分の経験やそのときの感じ方，考え方と照らし合わせながら），自己の生き方について考えを深める。	知的活動 感情・情感 自己肯定感 自己実現

　これは道徳の時間だけで成立するものではない。他教科・他領域と関連付けた学習や自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲を高める日常的な活動などが関連して効果を発揮する。また指導者が，児童の感じ方や価値観を認め励まし，成長やがんばりを促すことや，児童自身の自らを見つめる目を育てていくことも大切である。

（４）研究仮説

　特別の教科　道徳を中心として，多様なかかわりから自己を見つめ,他者と共に学びを深める学習を充実させれば，自らを表現し，自他や周囲と豊かにかかわる児童を育成できるであろう。

（５）研究内容（研究の方向性）

【特別の教科道徳及び道徳教育を柱として】

〇３つの柱

①　多様なかかわりを生かす道徳教育の充実
・「ユニット道徳」や生活科，総合的な学習の充実

②「かかわる」「表す」「見つめ直す」学びの充実
・児童が問いをもち，「選択・判断」をして対象に働きかける場
・自分の感じ方や考え・価値観を自分なりに表出できる工夫
・対象，他者，自己とのかかわりを深め，道徳的価値の理解や自己の生き方について考えを深める対話の場

③　自己有用感，自己実現の場を育む土壌づくり
・自己肯定感を育むフィードバックや道徳ノートの工夫

　また本校の育てたい資質・能力「主体性」「表現力」の育成をもとに，大切にしたい事柄は次の通りである。

【基礎・基本の定着】

・算数科を中心とした授業改善（つけたい力・児童の実態・手立てがつながる授業）
・漢字や計算力の定着を図るチャレンジタイム
・主体的な学びを育む学習課題（自主学習ノート，調べ活動など）
・ICT 機器の活用

【表現活動の充実】

・理由や根拠を明らかにして自分の考えを書き表したり，言葉や語彙を豊かにしたりする学習
・えんぴつタイム（伝えたいことを考え，目的や条件に合わせて適切に書き表す活動）
・様々な発表の場（異学年，地域，他校など）

（６）検証の指標及び到達目標

○アンケート調査（四段階尺度法，年間３回：５月・１０月・１月）

＊（　）は昨年度の値

視点	方法	アンケート項目	目標
【自らを表現する】			
表現	学校評価 アンケート	・自分の思いや考え，感じ方を自分なりに表している。 ・経験や体験をもとにしたり，理由や根拠を明らかにしたりして表している。	肯定的評価 85% (83%)
【自己有用感や自己肯定感，自己実現への意欲】【自他や周囲（外界）と豊かにかかわる】			
自分	学校評価 アンケート アセス分析 （年２回）	・自分にはよいところがある。 ・自分がまわりの人からみとめられていると思う。	肯定的評価 80% (76%)
他者		・友達や周囲の人とのかかわりを通して，相手のよさや特ちょうが分かってきた。 ・友達や周囲の人の気持ちを考えて行動している。	肯定的評価 85% (93%)
集団 周囲 地域		・クラスや集団がよりよくなるように，自分ができることを考え，実践しようとしている。 ・委員会や清掃活動，縦割り班活動など，他学年や全体がよりよくなるように，自分ができることを考え，実践しようとしている。 ・地域や周囲の人の力になれるように，自分ができることを実践しようとしている。	肯定的評価 85% (88%)
ひとこともの		・「なぜ」「調べて（やって）みよう」などと，進んで課題に取り組んでいる。 ・調べたり試行錯誤したり，粘り強く取り組んだりして課題を解決しようとしている。 ・話し合ったり調べたりして「なるほど」と感じたり，「もっと～したい」と感じたりしている。 ・わかったことやできることがふえたと感じている。	肯定的評価 85% (81%)

○パフォーマンス評価・記述分析

教科・活動	方法	視点	＜時期＞
【自らを表現する】			
えんぴつタイム	記述評価	・各学年のめざす姿を概ね達成していると考えられる記述ができている。	＜年間３回＞ 通過率 85% （82%）
道徳の時間 国語科など	パフォーマンス評価（記述評価）	・自分の感じ方・考え・価値観を表現する言葉や語彙が豊かになっている。	＜年間３回＞ 成長・変容・高まりが見られる児童 85%
【自他や周囲（外界）と豊かにかかわる】			
特別の教科道徳 ユニット道徳	記述評価	・道徳的価値に対する理解（自己理解・他者理解・人間理解など）に深まりや広がりがある。 ・継続的な評価で個人内成長が見られる。	＜学期に１回＞ 成長・変容・高まりが見られる児童 85% （82%）

生活科・総合的な学習の時間	パフォーマンス評価（記述評価）	・ひと・もの・ことへの認識を変化・深化させている。 ・他者と協働して問題を解決し，よりよい生き方を求めようとしている。 ・自己を見つめ，自分の思いや考え，価値観を自分なりに表現している。	＜年間２回＞ 成長・変容・高まりが見られる児童 85%（84%）

２　指導・助言者

氏　　名	所属・職名等	備　　考
植田　和也	香川大学大学院教育学研究科　教授	特別の教科　道徳
	尾道市教育委員会　指導主事	
北川　裕子	尾道特別支援学校しまなみ分校 特別支援教育コーディネーター	特別支援教育

３　研修計画

月	研　究　内　容	講　　師
４月	理論研修	
５月	アンケート調査① 校内授業研　【道徳科】	
６月 ７月	授業交流【道徳科】 校内授業研【算数科】	香川大学大学院教育学研究科 教授　植田　和也　先生
夏季休業中	実態分析，ユニット道徳交流	
９月	校内授業研【算数科】	
10 月	アンケート調査② 校内授業研　【道徳科】	
11 月	因北小学校授業公開【道徳科・総合的な学習】	香川大学大学院教育学研究科 教授　植田　和也　先生 尾道特別支援学校　しまなみ分校 特別支援コーディネーター 北川　祐子　先生
１月	校内授業研　【道徳科】	香川大学大学院教育学研究科 教授　植田　和也　先生
	アンケート調査③，ユニット道徳交流	
２月	研究のまとめ	

【引用・参考文献】
・小学校学習指導要領解説　総則編（平成 29 年）文部科学省
・国立教育政策研究所（平成 27 年）『生徒指導リーフ～自尊感情？自己有用感？～』
・近藤卓（2010）『自尊感情と共有体験の心理学』金子書房
・前野隆司（2013）『幸せのメカニズムー実践・幸福学入門』講談社現代新書
・小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編（平成 29 年）文部科学省
・小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編（平成 29 年）文部科学省
・溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授パラダイムの転換』東信堂